

異類の存在論

前田麻澄

はじめに

私は昔、架空の友達を空想して遊んでいたことがある。しかし、そのような友達は存在しない。少なくとも私以外の人間にとっては。また、私は幼いころから空想の物語が好きだった。だが、その物語の世界もまた存在しない。不思議な世界のない現実つまらない世界に感じた。正体不明のものに想像力を駆使して、恐怖の対象にしたてたものが、科学的に簡単に片付けられてしまうと、安心するより悲しかった。「われわれ現代人が事物のあらゆる細部を不透明な事物の内部に至るまで物として完全に理解できる、と信じている¹」とあるように、すべての事柄が想像性なしに説明されているようなことに寂しさを感じたからだ。

私たちは自分の死後の世界、超自然的体験、心霊現象などの内容に全く触れず生活していることはない。彼岸にお墓参りへ行くのは慣習的なもので、信仰を持っていないのだろうか。確かにそういう人もいるだろうが、多くの場合は先祖の霊を供養する気持ちや死後の世界の想定があるのではないだろうか。科学的・合理的に人の死を了解するのであれば、遺体は焼いて灰を土にまくか、そのまま山でもどこでも行って土に埋め、バクテリアに分解してもらえばよい。墓を作る必要もないし、葬式も必要ない。しかし、私たちは心情的に、そういうものを受け入れ難い。一方で、心情的にそのようであっても、いざ神の存在を信じるか、霊の存在を信じるか、と問われれば皆が同じ返答をしないだろう。それはなぜなのだろうか。科学的に説明できないからだろうか。

ある対象の存在を信じている人と信じていない人の間には、「存在」に対する思いにずれがあるように思う。目の前にあるコップの存在を疑う人はほとんどいないのに、特定の対象に対してのみ存在するかどうかの意見が分かれるということは、私たちが暗黙のうちに存在の条件を持っているからだろう。そして、その条件が異なるごとに存在の真偽が問われるであろう、神々や幽霊、妖怪を私は「異類」と名づけることにする。

私は、この機会を通して、改めて異類の存在を捉えなおしてみようと思う。私自身、異類が存在していると断定できないからだ。明確に私たちが考える存在の条件を考察していけば、私たちが日常で存在していると考えられているものの存在の意味についても、考える契機となるであろう。まずは私たちが無意識的に捉えている存在の意味とは何かを考えていかなければならない。その際、知覚抜きに考えることはできない。なぜなら、異類に対して存在の信頼性が、視覚可能かどうかで語られることがあるからである。しかし、視覚可能かどうかで存在を判断するには不十分なことがある。それが見えても触れられなかったり、聴こえても見えなかったりする幻覚と、見えないけれども存在が信じられている細菌や原子の存在があるからだ。そこで次に、現代の脳科学で認められる知覚（二元論的に考えられた知覚）を考察する。すると、私たちの知覚が確実性を持たないということになる。それに対して二元論に含まれる解決できない欠陥を大森荘蔵やジョン・R・サールの意見をもとに批判し、一元論的結論を導く。最後に改めて、知覚についての考察を深め、知覚以外にも私たちが対象を存在していると信じる事柄について、さらに異類が存在する意味について考察していきたいと思う。

¹ 『知の構築とその呪縛』 p.26

第一章 「存在」について

私たちは、自分が今ここにこうして存在していること、誰かと話しているとき、相手が自分と同じように存在していること、コーヒーを飲もうとマグカップに手を伸ばしたときテーブルの上にマグカップがあること、自分の方を見て尻尾を振っている犬が目の前にいること、これらのことを疑うことはないだろう。だがしかし一方で、昨日見た白い物体はなんであったのか、祖父母が神棚に向かって熱心に拝む対象の姿は何か、夏になると取り上げられる心霊写真と呼ばれる所以の物体について、私たちは仮にそれを見たという経験があるとしても、その物体の存在を疑いはしないか。

大森荘蔵の「最古の存在の意味とは、立体的事物の中に籠められた存在の意味である。²」とある中で存在について考える時、例えば私が目の前の机や椅子（立体物）を見たとき、その対象が存在することを信じて疑わない。なぜなら、机や椅子は現に自分の目の前にあることが知覚によって確認できるからだ。そして、惑星や微生物は望遠鏡や顕微鏡その他どんな手段であれ見ることができ、存在することも信じている。なぜなら、どんな手段であれ、自分は現に見ることができからだ。一方、異類のもの・超自然的なものである幽霊・神々・妖怪等は知覚可能かどうかわからないので、その存在を私たちは疑う。そして、見えないものは存在しないのだから、神々が存在するとは考えられず、神々が信仰の対象とされないこともある。ところで、自分が仮にそれらを見たとしても、その時点から机や椅子の存在を信じることと同じように、異類の存在を信じるようになるのだろうか。仮に見えたとしても「気のせいかもしれない。」というようにして、疑うこともある。今まで、見えるか見えないかといった視覚を根拠として述べてきていたが、果たして知覚、特に視覚のみが存在の根拠として良いのだろうか。そもそも、私たちは何を根拠として存在する・しないとやっているのだろうか。

私たちは生きていくかぎり何かをなし、何かについて考えている。どんなものであれ、私たちは行動・思考する時、その行動・思考の対象となるものは存在している、と私は考える。なぜなら、無を相手に私たちは何かをしたり、考えたりすることはできないからだ。ここでいう「存在」とは、一般に物体として「ある」「ない」というものではなく、私たちは実体を欠くものを思考・行動の対象とすることができる。それは「存在」ということになる。例えば、数や幾何図形などは、実体がないけれども私たちは思考できる。また、「京都駅」について思考するとき、思考された対象の「京都駅」は確かにあるけれども、実体として「京都駅」というはっきりしているものはない。あるのは、京都駅のホームであり、改札であり、屋根であり、券売機である。このように、実際物体として存在しないものでも、思考・行動の対象として、数はあるし京都駅もある。

すると、普段存在が疑わしいと思われているものについても同様に私たちは怯えたり、崇拜したり、愛着を持ったりするということから、異類のものも存在しているといえるのではないか。ここでも行動・思考の対象となる以上、存在しているといえる。しかし、私たちは依然として明確に存在するものと存在しないものという区切りを持っているのは、私たちが存在の根拠を考える時の最も重要な要因が知覚だからではないだろうか。

² 『時間と存在』 p.134

知覚的根拠が欠けている場合、例えば見えないものや触れられないものがあるとき、私たちは対象とする存在そのものを疑う。このことに関して、私たちは存在するものを物体として考えている。目の前に物体として存在する椅子に私は坐ることができる。同時に、知覚（視覚・触角）が欠けていても物体であると認識されている月や原子に対して、月を愛でることもするし、科学的物理的思考もする。仮に知覚できるものが存在していると言えるのなら、確かに机や椅子、月や星は実際に見ることができているのだから存在しているのだろう。しかし、微生物は触れられないし直に見ることもできない。数や一般名詞も概念はあるが知覚できるかはあやしい。つまり、知覚できなくても、存在しているものがある。だから、殺菌消毒もするし、計算もするのである。それは、物体としてあるかどうかが存在を決定するというのではない、ということではないだろうか。

また、たとえ机や椅子を見たとしても、それはただ机や椅子の正面を見ているだけで、同時に机や椅子の背面を見ることはできない。それにも関わらず、私たちは今見ている机や椅子には背面があり、その背面を想像し机や椅子がベニヤ板に描かれたものではなく、立体物であると了解している。それは、知覚した机や椅子が、立体であるという事実を直に私たちに了解させているとは言い難いのではないだろうか。もし、知覚のみで物体が立体であることを了解するには、立体としての条件、つまり正面だけでなく、背面や側面があることを同時に知覚できなければならない。だが、知覚可能なのは、現在において物体の正面のみである。さらに、遠くにある木星や土星等の惑星、ミクロ単位の細菌などは、肉眼で直に見ることができず、私たちは望遠鏡や顕微鏡を用いる。現に見えていたとしても、私たちはなぜ何かを通して知覚できると思い、存在していると思うのだろうか。

このような例から、知覚できることを、存在の条件とするのであれば、知覚できないものは存在しないし、立体的なものは、存在しない。だが、私たちは知覚できないものが存在していることを知っているし、正面を見ただけで、立体であることが分かる。したがって、机や椅子には、それを知覚したときに机や椅子が立体であることを了解させる条件があるだろうし、直に知覚できない細菌や原子はその存在を裏付ける知覚以外の条件が、対象が存在することに至らしめていると言える。では、行動や思考の対象の存在を確かなものとし、私たちの行動、思考を支えるに至る要素は何であるのだろうか。

そして、肉眼で見ることができず、さらには触ることが不可能なものの存在や、物体として知覚できないものなのに、存在すると思われている、数や京都駅はどういった条件が必要なのだろうか。

第一に、知覚は存在の重要な条件であることは明らかであろう。実生活で私たちは何かを見たり、触ったり、聞いたりしている。例えば、朝目覚まし時計が鳴る音で起き、朝食を作って食べ、出掛けるために仕度を整える。この時のさまざまな行動は私一人の存在ではなく、時計や朝食、食器、洋服などが存在し、事実私たちはその存在を疑わず行動している。これは、専ら時計の音を聞き、食器に触れ、食物を味わい、どれも実際にその対象を見ている。だから、まずは知覚が重要な存在の条件といえる。

第二に、その知覚したものが物体で、それが立体であることを知らしめるためには、一般に対象を見たときにわかる陰影や、実際に触ったりしたときの感触が必要である。これは、経験的に私たちが日々、手前のものは明るく大きく見え、一点に三方向の平面がある

感觸は立体を表していると経験的に学んでいるからである。知覚したものを、より事実に近づけ存在を立証するのは、ただ見るだけではなく、触れることができる、聞くことができるという知覚と私たちの経験的な知識であろう。

第三に、見ることができても、触れることのできない夜空の星々が存在している、という条件は知覚の持続性・連関性が考えられる。毎夜、空を見上げれば東から昇り西に沈む星の日周運動が観察でき、季節ごとに変化しながらもオリオン座は各々の星が等間隔の位置を保ったまま、毎年冬の空に私たちの上にあることを私たちは確認できる。今見えていたはずの星が、一時間後あるいは明日に昨日とほぼ同時刻の夜に見えなくなっている、ということはない。

第四に、直に見ることもできなければ、触ることもできない細菌や原子は、私の経験上と言うなら、写真が根拠であるし、周囲の人々と自分自身の認識の整合性であろう。ようするに、知覚した内容、あるいは対象の存在が公共的である。写真は、少なくとも被写体が存在することを前提としているし、他人が私たちと同じような感覚を持っていると私たちは思っている。自分だけが、ビフィズス菌に整腸作用があると信じているわけでもないし、ブドウ球菌が果物のブドウに似ている形をしていると信じているわけでもない。また、太陽系の惑星には水星～海王星（冥王星は除外されてしまった）の順序で公転していることも、リングのついた惑星が土星だということも、そしてその星が実際に存在していることも私だけの認識ではない。

異類のものは、知覚されたとしても第一から第四の条件にある何かが不足しているために、私たちの中で存在の信頼性が揺らいでいると考えられる。存在するためには、知覚が重要だが、知覚だけでは不完全なのだ。しかし、これら四つの条件で共通して重要とされているものは、第一から第三の条件においてもわかるように、知覚であるといえるだろう。

第二章 二元論的知覚

第一節 脳科学における知覚

まずは、存在を考えるにあたって重要な要素であると思われる知覚について考えていかななくてはならない。知覚的根拠、特に視覚的根拠からなる存在は、私たちの生活において重要な位置を持ち、私たちは、それが存在の信念に強い影響を与えているだろうと思うからだ。したがって、知覚されたものの存在は大体において私たちは信じている。しかし、思考の対象になり知覚したとしても、知覚の信頼性は、幻視や幻聴というものによって、揺るがされることがある。だから、私たち全員が神や幽霊などの存在を信じていると、言うことはできない。普段は、知覚的根拠に存在を委ねていても、仮に異類を知覚したとき、前章の条件とは別に、知覚することそのものに私たちの疑いが生じている。そして現代では、幻覚が脳あるいは神経系の作用として実際に起こりうるものであることが立証されている。その例を挙げてみよう。

V.S.ラマチャンドランとサンドラ・ブレイクスリーの『脳の中の幽霊』で取り上げられているのがシャルル・ボネ・シンドロームである³。シャルル・ボネ・シンドロームは眼あるいは脳の視覚路のどこかに損傷があり、視力がまったくないか、ある程度損なわれている人が、失ったものの「代わり」に幻覚を見るようになることである。そして、それは私たちの意識でコントロールできない。また、患者が眼を閉じれば見えていた幻覚も消えるのである。

この症状は極端な例であるが、一般に私たちにも同じような作用が働いている。それは盲点と呼ばれる。これは簡単に確認することができる。灰色の紙に 1cm 幅の黒い直線があり、真ん中に長方形がその直線を分断しているとする。直線を分断している長方形から 10cm ほど右側に直径 1cm 程度の黒い点がある。手で右目を押えるなどして、その黒い点を左目で見つめると、ある距離で隣にある直線の真ん中にあっただけの長方形が消え、かわりに分断されていたはずの黒い直線が一直線に見える。その部分こそが盲点にあたるのである。盲点の部分は、空白の部分として現れるのではなく、脳が欠けた情報を補う。ここでは、本来なら長方形で分断されている直線であるものが、長方形が盲点に入り込むことによって、脳に長方形の情報が伝わらず、視野にある二本の直線を脳が一直線の黒い棒と判断した結果、私たちには一本の直線の黒い棒に見える。このように、脳が欠けた情報を推測して補うことを「書き込み」という⁴。普段の私たちは、両眼視で右目は左目の左目は右目の盲点をそれぞれ補っているので、私たちは盲点の存在に気づかない。

また、私たちは何かの物越しに猫や人などを見るときも、物体に遮られた猫や人の姿を見るのではなく、全体の姿を想像して見ている。これは、脳が今までの経験から、物越しに見える対象を作り出している結果である。そして、私たちが後ろにある本棚や風景を想像するときとは違って、この知覚の想像は私たちの意志で変えることはできない。

このように、脳の働きによって私たちは無意識的に実際には知覚していないものを知覚

³ 第 5 章 p.124 p.157

⁴ 『脳の中の幽霊』 p.128

している。「あえておおげさな表現をすれば、私たちはいつも幻影を見ているのであり、私たちが知覚と呼んでいるものは、どの知覚が現在の感覚入力にもっともよく適合するかを判断した結果なのである。⁵」とあるが、まさに私たちは脳の作用によって、脳が推測したものを知覚していると考えられるのである。脳は、視覚において視覚の処理を節減するために統計的な規則性を利用している。シャルル・ボネ・シンドロームは、その脳の作用が正常に働かないことによって、脳に自由に独自の現実を作り出されたものである。そしてまた、正常と思われている私たちの視覚にも、その疑いが全くないとはいえないのである。

さらに、菊池聡の『超常現象をなぜ信じるのか 思い込みを生む「体験」のあやうさ⁶』から知覚したものを記憶する曖昧さについて言及することができる。例えば、今ここで100円玉を思い出しながら描いてみようとする、正確に描くことはできない。しかも、正確さに欠けるばかりでなく、事実とは異なる情報が加えられることもある。このことは、人間がビデオの録画のように情報を記憶、再生しているのではなく、三つの記憶システム(感覚記憶・短期記憶・長期記憶)によって、情報に変容されると説明されている。ほかに例をあげると、長い民話を記憶させた後、何度も再生させると、省略や表現の変化や言葉や名称の言い換えが起こったり、実際には経験していない事柄についても、尋ね方や他人の証言によって私たちの記憶は書き換えられ、経験したりすることがある。実際に車が事故を起こしたときの車の速度について、ある集団には「どのくらいの速度で激突したと思うか」と尋ねた時の平均的な速度と、別の集団に「どのくらいの速度で当たったと思うか」と尋ねた時の平均的な速度では、時速約10km⁷の違いが生じる実験結果が出た。

これは、知覚の信頼性と言うよりも、知覚したこと(経験したこと)を事実のままに想起することが人間にはできないことを説明する根拠となる。よって、たとえ正確に知覚し、その知覚が幻覚ではないと考えていたとしても、それは単なる思い込みの可能性が出てくる。幻覚や超常現象を信じることは、私たちの脳が誤って働いた結果、あるいは生理的な脳の作用によって操作された結果ということが言える。つまり、今この知覚している机も椅子も、もしかしたら脳による欺きがあるのではないかと考えられる。そして、以前に知覚したと思っているものも、実際に知覚したものであるかどうかという疑いを持つこともできるのである。普段の私たちは、目の前のイスを見るとき、それが映像として網膜から視神経、そして大脳へ伝わり知覚していると考えている。「私に見え、聞こえている外部風景は最終的には私の大脳または松果線の状態によって決定されている。⁸」ということ、「私たちが現実的な対象として自覚^{アウェアネス}するのは、脳における経験だけである⁹。」ということになり、そうなると思えないものの存在が限られてくる。つまり、視覚や聴覚だけで存在を決定するのは難しくなってくるのである。

猫が走っている姿を私が見た時、その姿は光として私たちの目に届き、網膜から視神経、

⁵ 『脳の中の幽霊』 p.156

⁶ 講談社 1998 第3章

⁷ 著書では速度単位がマイルで書かれていたが、ここでは分かり易くするために、単位を km に置き換えた。

⁸ 大森荘蔵 『知の構築とその呪縛』 p.205

⁹ ジョン・R・サール 『MiND 心の哲学』 p.133

そして脳に伝えられていく。そして、それはいくつかの質を知覚していることになる。その質を細密に描写したとき、幾何学・運動学的描写と、それ以外の描写（色、音、匂い、手触り等）に分かれる。これが客観的描写と主観的描写の違いである。主観的描写の色、匂い、硬さ等は、特定の状況で私たちが感じる性質であり、もの本来にはない。感覚する主体が存在しない世界では、色も匂いも響きも意味を失ってしまう。だから、そういった色、音、匂い等は私たちの心の中にある。それゆえに、色、音、匂い等は生きているわれわれの心の中、つまり意識・精神にあるだけなのである。ある物体をイメージする時、私たちはどんな形か、動くものか、どこにあるか、どのような状態で存在するかなどを条件としなければイメージできない。しかし、色や味、音、匂いは必ずしもイメージしなければならない条件ではなく、これは五感が伴わなければイメージできない。この感覚的性質は、知覚する私たちによる主観的なもので、ものそのものにあるわけではないのだ。だから、知覚の主観的要素を取り除いた時、残るものは無味無色無音無感触のもので、「物」は存在し、存在し続ける¹⁰。「知性だけを使用することによって、我々は物質即ち一般的意味の物体の本性が[略]存することを知る¹¹」とデカルトの言葉を引用して、大森荘蔵が説明している。

明治期に妖怪や幽霊など非科学的とされる存在を、物理学や哲学、心理学等の面から分析した井上円了は「妖怪の有無は、物にあらずして人にあり、客観上に存するにあらずして主観上に存す。¹²」と言っている。ここでは妖怪に限定されているが、井上円了によれば、我々が妖怪の存在を信じてしまうのは、知覚した時の私の主観に及ぼす当時の状況が原因であるということだ。客観的にもものそのものを見た時、それは妖怪ではなくなる。例えば、主観的に見れば幽霊であっても、客観的に見れば枯れ尾花であるように。私たちの感じ方によって、私たちは知覚した対象を決定している。円了の主観と客観は、単に私的と公的の違いについてだが、知覚した対象のうち妖怪などの特定のものを主観的な知覚と言い、実生活で知覚している植物や動物などが客観的な知覚であるとは言いがたい。主観的に知覚したものが幽霊で、客観的には枯れ尾花である。そして、主観的に知覚した本人も、後に枯れ尾花であることを知覚しても、どうして、後に知覚したものが客観的であるといえるのだろうか¹³。それはただ単に、始めは幽霊と知覚したものが、後では枯れ尾花だったというだけの話で、遠くから見えた円い煙突が、近くで見ると四角い煙突だったというものと、知覚的な面において質的に何ら変わりはないと私は思う。しかし、このように前に知覚したものが、欺かれた知覚であることが後になって発覚する事実こそ、私たちが真にもものそのものを知覚できないという理由となる。なぜなら、もし私たちが正しく対象を知覚しているのなら、どこから見ても四角い煙突は四角く見えるはずだからだ。

¹⁰ 以上は大森荘蔵『知の構築とその呪縛』p.124-137を要約

¹¹ 『知の構築とその呪縛』p.133より、デカルト『哲学原理』桂訳 2部 11節 岩波文庫 p.103

¹² 井上円了『井上円了 妖怪学全集 第1巻』柏書房 1999 p.59

¹³ 知覚の客観について誤解が生じるかもしれないが、ここで井上が述べている客観は、共同的で主観は個人的である。この主観と客観はどちらも知覚であるが、私がこれからとりあげる主観と客観は井上の述べた主観と客観とは異なるということを言明しておく。

第二節 哲学における知覚とその批判

デカルトは、世界は二種類の実体¹⁴または存在者に分かれていると考えていた。言い換えれば、心的な実体と物理的な実体である。デカルトの二元論は、私たちの存在を心と身体にわけ、それぞれ「思惟・意識¹⁵」と「物理的延長」であると定義づけた。知覚される対象を、私たちは自分の表象¹⁶あるいは観念を通して心に映し出され、それを私たちは知覚するのである。よって、意識以外のものは直接的に知ることはできない。しかし、一方で私たちは自分自身の意識が存在することについて思い間違ふことはない。だから、自分自身の意識、その拠り所となる心は疑い得ない。このことに関して、まずは次の表¹⁷を参考にしてもらいたい。

	実体	
	心	身体
本質	思惟（意図）	延長（空間的時限を持つ）
属性	直接的に知られる 自由である 分割不可能 破壊不可能	間接的に知られる 決定されている 分割可能 破壊可能

感覚的の形状は主観的の形状として、精神の中に存在し、幾何学的の形状は客観的の形状として物に属していることが確認できるだろう。ロックも、一次性質と二次性質に物事を分類した。二次性質は色、音、匂い等で、一次性質とともに対象の実在的な性質によって引き起こされる。しかし、対象そのものは二次性質に対応する性質を備えていない。このことは知覚の表象理論と呼ばれている。

バークリィは二元論を批判している。その批判の内容は、物体を思考するとき、その物体の運動をほかの一切の感覚的性質なしに思うことができるのかということだ。デカルトが遠くでは円く見える塔が、近くでは四角く見えることを感覚の欺きであると言ったが、果たしてそうだと言えるのか。つまり、どちらの知覚が「本当の」塔に類似しているといえるのか。「本当の」形がどんな形か、私たちは外部世界が知覚できない以上、知ることができない。よって、私たちは知覚したものが「本当の」物体に類似していることも確かめられないし、真であるかどうかも同様に確かめられない。

そして、ヒュームも同様にデカルトを批判している。それは、まず感覚的性質を欠いたただ形状だけを持つ物体は、了解不可能な概念であるということ。そして了解可能でも、何も知りえないということだ。例えば、原子の色彩または可触性は心に現れる。「外的な物体を考えることが可能だとしても、それが事実どのような形をもち、どのように運動して

¹⁴ 「実体」とは、存在するためにほかのものを必要とせず、それ自体で存在するものをさす。『MiND - 心の哲学』 p.29

¹⁵ 大森の説明によれば、思惟とは単に思考だけでなく、見たり聞いたり、愛したり憎んだり、意図したりと、すべての心の働きをいう。『知の構築とその呪縛』 p.152

¹⁶ [representations]感覚によって意識にあらわれる外界の像のこと。『MiND - 心の哲学』 p.39 ヒュームは印象[impressions]ロックは観念[ideas]とし、感覚与件と同意

¹⁷ 『MiND - 心の哲学』 p.32

いるかを推定する手がかりがひとつもない。¹⁸」ヒュームも、パークリィと同様に、表象が表象であることを論証するのは不可能であるとしている。なぜなら、私たちの知覚するものは、ものそのものでないが、知覚したものがものそのものに類似しているというためには、ものそのものを知っておかなければならない。しかし、私たちはものそのものを知ることが永遠に不可能である(不可知論)。また、知覚したすべてのものが、表象であるなら真に存在するものを知ることができないので、私たちは真に存在する対象について語ることは不可能になる。

例えば、ある車があなたの目の前にあるとして、隣にいる人が「この車は、隣の車とまったく同じなんだ。隣にある車は見えないけどね。」と言ったとする。そのとき、あなたは見えている一台の車が、見えないもうひとつの車と同じ車であることがわかるだろうか。よってこのことから、真に知覚したものと幻覚の区別がつけられなくなる。なぜなら、幻覚が幻覚であるためには、知覚したものが真に存在するものであって、幻覚は幻覚の対象が存在しない、あるいは真の表象を知覚しないという必要があるからだ。しかし、私たちは知覚している対象が真であるかどうかを確認することはできない。もしかしたら、真であると信じている知覚が実は対象の存在しない幻覚かもしれないし、幻覚であると思っているものが、実は存在するものがものそのものとしてある可能性だって考えられるではないか。

ここで、複視について考えてみると、私たちは目を軽く押さえたとき、目の前の鉛筆が二重に見える。私たちは二重の鉛筆を見るとき、二つの何かを見ているのだろうか。二元論的に答えるのであれば、私たちは対象の見かけを見ているのだ。しかし、これには明確な誤りがある。見かけには真の対象の立ち現れが必要であるが、対象そのものが二つになったわけではない。正しい答えは、私たちは一本の鉛筆を二重に見ている、ということである。

¹⁸ 『MiND - 心の哲学』 p.170

第三章 一元論的知覚

もし、私たちが二元論者の言うように、ものそのものの見かけや視覚経験だけを知覚しているのだとしたら、私たちがナイフを見ることも、マクベスが短剣の幻覚を見ることも、見かけを見ているだけだから、その間に質的な差が生じない。サールはこのことについて、知覚の理論は「知覚動詞の直接的目的語になるような名詞、しかも物質的対象を名指すことではないような名詞を言語論的に得ることをもくろんでいる¹⁹」と述べている。知覚動詞の直接目的語は、私たちとは別に存在する物的な対象を示さず、内在的な経験や私たちの感覚与件²⁰を名指す。例えば、私たちが何かを見るとき、その対象は、見る行為より前に存在しているが、マクベスの場合、見た行為の後でその対象が姿を現す。つまり、マクベスは外にあるものは何も見ていないのである。

しかし、私たちは正常な知覚と幻覚を区別している。幻覚があることを知っているということは、正常な知覚があることを知っていることである。たとえば、誰かに「この絵はあの絵の二セモノだよ」と教えられたとき、その絵とは別に本物である絵の存在が必要であり、当然存在することを前提としているだろう。そのとき、私たちは本物の絵を確認することはできるが、本物である対象とその表象の一致という点で幻覚と正常な知覚の区別を説明することは不可能である。なぜなら、二元論においては本物となる対象が知覚できないからだ。しかし私たちは正常な知覚と幻覚の区別ができる。正常な知覚とはどういうものか、一般に知覚できる存在について考えていこうと思う。

私たちは、目の前のテーブルを見るとき、そのテーブルを構成する原子や電子といったものの光を網膜が受け止め、視神経を通して脳に至ると思うことができるし、そうであると考えられる²¹。知覚できる存在には、原子や電子の存在が必要である。しかし、どうやって、その茶色いテーブルの知覚像から、私たちには知覚的に知ることのできない原子の集団が形成する大きさや形を知ることができるのだろうか。原子集合の規模や組み立て方によって客観的な大きさや形が決定されているのであれば、そのような大きさや形は、私たちの知るところを超えているものになる。しかし、私たちは、知覚像から原子集団の存在を推定している。その方法は、知覚的なテーブルの姿から、原子集団の存在を推定できるのではなくて、知覚している姿によって、原子集団を定義しているだけなのである。見えている机の大きさ、形から、原子集団の大きさや形もそういうものである、と定義づけている。こうして定義づけすることを、大森荘蔵は自らの言葉で「重ね描き²²」と言っている。外的な物理的事物によって脳の中に像ができる知覚と外的対象の因果関係は、知覚的描写と物理的描写の「重ね描き」という見方で訂正できる。物理的描写から知覚像に至るのではなく、私たちは知覚的描写と物理的描写を重ねている。例えば、四角い塔を遠くから見た時は円く見える場合、知覚の欺きを感じる人がいる。しかし、どちらかの知覚が誤りというわけではない。なぜなら、どちらの知覚が正しいかは確かめられないからだ。

¹⁹ 『MiND - 心の哲学』 p.343

²⁰ sense date を訳したもので、感覚を通じて私たちに直接与えられるもの
表象[representations] (カント) 印象[impressions] (ヒューム) 観念[ideas] (ロック) と同意。

²¹ これは、二元論的な考え方の特徴をもとにし、物理的描写である。

²² 『知の構築とその呪縛』 p.175-p.177

遠くでは円く見えた時、近くでも円く見えるだろうと推定しているから欺きと感じるだけであって、どちらの知覚もそう見えている。つまり、四角い塔を暗黙のうちに物理的描写と捉えている人は、その四角い塔が近くで円く見えることに、知覚の欺きを感じるが、実際は知覚的描写なのである²³。すると、知覚の誤りや欺き、幻覚はないのだろうか。

また、対象と表象を述べる二元論的でなくとも、日常で私たちが思い起こす東京タワーは実際に知覚した対象ではない。知覚していない・できないのだから、私たちが思い起こして立ち現れる東京タワーは、東京タワーそのものの表象だと思ってしまう。だが、対象と表象を厳格に区別しない構図からすると、本物の東京タワーは、二つの仕方 私たちに直に立ち現れる。一つ目は知覚的に、二つ目は思いの、である。また思いの立ち現れには、必ず想像的立ち現れか、かつての想起的立ち現れがある²⁴。知覚したとき、私たちは対象の表象を知覚しているのではなく、対象そのものを知覚しているのだ。

知覚されるものは、原則として存在する。では、細菌や数のように知覚できないものの存在の意味を私たちはどのように考えているのだろうか。知覚されたものは直に私たちに立ち現れる。だが、知覚されない細菌・数はどのようにして、私たちが存在を信じる根拠をなしえているのだろうか。

それは知覚できないものの存在が、「 というものである」と考えられた存在であるということと、幻覚の場合と似た形で言葉の働きによって存在することに重点をおいて説明できる。この時、私たちは考えられた存在に至る過程には、筋道が必要である。私たちは喉に痛みを感じたり、鼻づまりを感じたりしたとき、何かのウィルスが身体に侵入し、私たちの身体の中にある抗体が反応していると仮定する。そして、それを確かめるために喉の表面を綿でこすって、顕微鏡で見る。このとき、細菌はプレパラートに移動したと私たちは考えている。顕微鏡に写る物体が、移動した細菌の拡大相似形だと考えている。このような思考の過程を通して私たちは、細菌の存在を信じて細菌は身体に侵入し抗体を反応させ、綿でこすれば移動可能で顕微鏡で拡大相似形を見ることが出来る物体だと考えている。たとえば、私たちはインフルエンザの病原菌を直に見ることができない。しかし、悪寒と発熱、咳や鼻づまりなどの症状があらわれたときは、顕微鏡で確認できる物体はいつも共通の姿を持っているという事実は、その物体が悪寒、発熱、咳などの症状を引き起こす原因の一つであると考えることができる。「細菌の『考えられた存在』の意味は知覚世界に適合するように制作されている²⁵」とあるように、身体に起こる現象と、顕微鏡で確認される現象に因果関係の網が張り巡らされ、肉眼で確認できない物体は、顕微鏡などの手段を用いたとき、私はいつも同じ状況に対して同じ物体を確認できるという私たちの経験が、その存在を疑いのないものにしていく。

数も知覚世界に適合されるように考えられた存在であるだろうか。テーブルの上に三個のりんごが置いてあったとしたら、私たちは自然に「三個のりんごがある」ということを

²³ そして、知覚されたものが立体物として見えることに関して、大森は正面を知覚しているときに、背面・側面から見た物体の姿を思い描いていると述べている。その思い描かれた像は、正面を知覚している現在において実証不可能であるけれども、私たちは実際の知覚像と想像的知覚像を同時に抱くことで、対象を立体的に捉えている。(『大森荘蔵著作集第4巻 物と心』p.218-224)

²⁴ 『大森荘蔵著作集 第4巻 物と心』p.130-p.136を要約

²⁵ 『時間と存在』p.137

認識するだろう。目の前にないときでも、言葉のりんごは普遍的な性質を持つりんごであり、三個も同様に普遍的な概念である。普遍の存在の意味は何か。例えば、個別的な犬（祖父の家にいるドムという名の老犬）を思い浮かべることには何の問題もないのだけでも、犬一般を思い浮かべたとき、そのときの犬が表す意味は何であろうか。「あそこに犬がいる」という場合でも、発した言葉の犬が示すものは目の前にいる個別的な犬ではなく、普遍的な犬である。そのとき、犬の普遍的なイメージが浮かぶだろうか。しかし、「普遍とは考えられる（conceive）もので、知覚される（perceive）または知覚的に想像されるものではないのである。²⁶」実際に、バスから降りてきた人を見て「学生かな」と思っても、学生の映像のようなものは浮かばない。その時私たちは学生の普遍的なイメージを具体的なビジョンで捉えていない。個々に知覚したものを、私たちはその一例として考えられるのが普遍である。イチゴの赤という一例を見て、赤という普遍を思考することである。普遍の存在は、私たちが生活する中で思考するとき現れる。そして、このことは細菌と同様にして知覚世界に適合するように考えられる。

例えば私たちは3というものが実体として想像することは困難でも、3個のりんごを想像することはできる。また、3そのものを知覚することは不可能でも、私たちは紙とペンさえあれば、3を記号として書くことができる。自然数として私たちは小学校で四則計算を学び、0や分数、小数を学ぶ。そして、負の数、有理数・無理数、虚数の抽象的な高次の数学的概念の存在を学ぶ。この数の普遍的な存在を基にして私たちは長さや面積、体積、速度を求める。これらの経験にある語りを通して、私たちは、数や幾何図形の普遍的な存在を認識している。また、これらは知覚世界に適合するように語られる存在であると同時に、考えられた存在でもある。しかも「われわれが現に住んでいるこの生活空間の中に考えられる。²⁷」知覚されないものは、知覚世界に適合するように存在している。知覚世界を作るためには、知覚することが必要であるが、私たちはどのようにして正常な知覚と幻覚の区別をしているのだろうか。

前章で、マクベスが何も見ていないということであったが、実際にマクベスは幻覚の短剣を見ているということは否定できるだろうか。また、シャルル・ボネ・シンドロームの例にあるように、私たちは実際にはないものを見る可能性がある。シャルル・ボネ・シンドロームの患者は多いらしいが、知名度が低いのは患者自身が、実在しないものを見てると自覚しているにもかかわらず、他人にその事を伝えなためだという。一方、マクベスは己の見ていた血なまぐさい短剣を、自ら「幻の短剣」と口にし、自分が知覚したものを定義づけた。幻覚と正常な知覚の差は、視覚において説明することは困難である。なぜなら、実際に本人は見ていたからだ。しかし、シャルル・ボネ・シンドロームの患者も、マクベスも、もちろん私たちでさえ見えているものが、幻覚か正常な知覚かを判別できる。その判断する条件はいったい何か。まず一つは、マクベス自身が見えるけど触れない短剣を「幻の短剣」と名づけた時の状況でも分かるように、触覚が視覚に伴わないということが言える。そして、シャルル・ボネ・シンドロームの患者においては、幻視の映像が、別の視覚と関係が持てないという事、つまり壁面の絵画を見るように、幻視の対象が知覚風

²⁶ 『時間と存在』 p.147

²⁷ 『時間と存在』 p.155

景から切り離されている事と他の知覚(聴覚や触覚)と整合しないということだと言える²⁸。知覚できないものの存在の意味が、知覚世界に適合する形であるのなら、正常に知覚できる存在の厳密な意味は、知覚どうしが関連していると言える。そして、知覚の関係性において同時に知覚できることと、物体を知覚した後に、別の知覚が物体を確認できることが必要である。例えば、自分の背後で物音がしたとき、振り返れば本が落ちているなら、物音の正体は本が落ちる音だったということであるが、何も確認できないのであれば空耳(幻聴)となる。また、目の前を何か黒い物体が横切ったように見えた場合、横切る瞬間に動物の匂いと物が横切るときに生じる風を感じ、物体が向かった方を見れば黒い猫の姿を確認でき、猫の鳴き声を聞いたなら、目の前を横切った物体は猫であったと思うだろう。しかし、何も知覚によって関係性のある事柄を確認できなければ、私たちは知覚したことを気のせいだと思うだろう。このように、正常な知覚と私たちが考えるためには、知覚どうしが関係性を持ち、その関係性には時間的連続性を持っていることが必要である。

そしてまた、それらの条件を満たす知覚が、個人的な知覚ではなく、同じ状況で他人も同じような条件を満たす知覚をする必要がある。公共的な知覚は言語によって語られる。そもそも、知覚世界に適合するように考えようとするには言語が必要であり、言語は個人的なツールではなく公的である。よって、正常な知覚の存在も知覚世界に適合されるように考えられた存在も、どちらも言語によって表現される。「あそこに猫がいる」と言った時、他人も了解できるように。

²⁸ 患者の中には、まったく視力を失った者もあり、その事実も判断するときの条件と考えられるが、ここではそのことについては述べない事にする。

第四章 異類の存在形態

私たちは何かを知覚して生きている。例えば、朝太陽の光を感じて目覚まし時計の音を聴き、湯を沸かし食事をし、他人と会話をしている。これらすべてのことに関して、仮に知覚しているものが存在しない、あるいは見えても触れられないというように触覚を欠いていたとしたら、私たちは地に足をつけることもなく、食べ物を口に運ぶこともない。それは生きているということにはならない。しかし、私たちは生きていると思っている。椅子やテーブル、食パン、目の前にある階段、自動車、両親、友達が存在する条件、それは知覚できるということ、そしてその知覚が真実であるためには知覚の中でも触れるということが必要である。もし、目の前にある椅子に座ろうとしたとき、その椅子が不可触の存在であったなら、私たちは椅子に座ることはできない。この場合の椅子は幻覚になるだろう。視覚可能で、可触性のある事物の存在は、私たちの生に直結している。こういった事物を大森は実践的優位の存在として扱っている²⁹。盲目の人でも聾啞の人でも、生活に必要なものは触れることができる。私たちは物体の存在を考えると、視覚・聴覚よりも触覚に重点を置いている。

そして、直接実践的優位の存在にはならないけれども、知覚世界に適合するように考えられた存在・語られる存在に普遍や数がある。動物としての生活、例えば寝たり天敵から逃れたり、食事をしたり交尾をしたりする生活の枠組みから、私たちは言語を使用したり計算したり、道具を作って使ったりするようになり、人間としての生活において普遍や数は必要な存在となっている。なぜなら、道具を作るのには数量計算が必要だし、抽象的なものを留めておくのには、言語が必要だからだ。ここで、マクベスの例を思い出してみると、マクベスが見た短剣は、マクベスの言葉によって私たち観衆の前にも存在を現したと考えられる。言葉の働き（特に独り言、自分用に書く行動）は自分に立ち現れている「もの」「こと」の確認のための表現ではないか³⁰、と大森は述べている。マクベスは、見える短剣が触れられないという事実を確認するために独り言を言った。そして、マクベスにしか存在しないものであった短剣はマクベスによって「幻の短剣」という名を与えられ、私たちの前に存在することとなった。だが、マクベスの短剣はいくら言葉で語られようとも、他の知覚される現象と関係を持たないし、前後で知覚された現象とも直接的な関係を持たない。たとえマクベスにとってこれから起こる運命の道しるべになろうとも、私たちはマクベスのような運命が待ち受けるときに、いつも短剣が見えるわけではない。マクベスの短剣はマクベス個人のもので、公共性をもたない。そして、この短剣は生きていく上で必要なものではない。普遍や数は、動物的生活には必ずしも必要ではなくとも、人間の社会的生活を営む上で必要になってくる存在である。そして、その存在の仕方と言うのは、私たちが考え、その考えと知覚できる現象との因果関係を連関的に語るができなければならない。一般に、私たちが存在していると認めているもののほとんどが、このように自

²⁹ 『大森莊蔵著作集第4巻 物と心』p.164

³⁰ 『大森莊蔵著作集 第4巻 ものと心』p.141

サールは命題Pが真であるためには、公的に共有され知性によって理解できる論述を、私たちの世界で公的な言語によって意思疎通できることが必要である。そして、それが実際にできているということは、同じ対象に対して知覚的なアクセスを共有しているということを含意していると述べている。

『MiND - 心の哲学』

分たちの生に密着する中で確認され考えられたものであると言える。そういったあり方で存在しているものを、私たちの生活圏内に存在するという意味も含めて、「同類」と名づける。

はじめに異類は神々、幽霊、妖怪などを指し示すことにしたが、この異類は同類のような存在の仕方をしない。もし、異類が同類のような存在の仕方をしたとしても異類は、正常な知覚で確認できるようなものではない、と誰もが認めるだろう。普遍や数と同様に知覚世界に適合するように考えられた存在・語られる存在、あるいは幻覚だろうか。しかし、異類との遭遇は数や普遍とは異なり、日常茶飯事ではない。ここで、明確にしておかなければならないのは、異類は特定の作者が創り出した想像上のものとは異なるということだろう。この場合の創造されたものは、存在を信じている子どもがいたとしても、作者が創造した時、すでにその対象は虚構を前提としている。創造者自身がそれらのキャラクターの存在を虚構として捉えている。しかし、異類の存在は、そもそも出発点において実在していた。つまり、異類は実際に存在すると思われていたという過去を内包している。そして、人によっては現在も存在すると信じているものである。架空のキャラクターを信じなくなるということと、異類の存在を信じなくなるということは少し違いがある。前者は、創造されたものであるということを知ることによって信じなくなり、後者は今まで考えてきた存在の条件を満たされないことによって信じられなくなる、と私は思う。

私たちは普遍や数の存在を疑うことはしないのに、異類の存在については疑いを持っている。その時点で、私たちは異類のものを普遍や数とは異なる存在の仕方をするものとして捉えている。普遍や数と異類との間にある存在の仕方の違いがある。考えられた存在・語られる存在というのは、時間的再現性・因果性が必要である。インフルエンザの症状が出たら、顕微鏡で確認できる細菌の姿がいつも同じであることや、いつも $1 + 2 = 3$ になるということなど、私たちはいつも同じ事象に対して同じ考えを持ち、それに対して因果関係も捉えている。私たちは公共的な言語を用いて、他者と会話をする。その時、東京タワーが話題になれば、私たちは話者間で同じ東京タワーが立ち現れていると思うことで、知覚世界やそれに適合するように考えられた存在が私だけのものではないということが分かる。異類はそのような仕方では存在しないだけであって、存在そのものを否定することはできない。なぜなら、異類はかつて存在すると信じられていた過去を持っているからだ。そしてまた、現代においても異類の存在を信じている人がいる。だが、その存在を信じている人たちは、異類が人やコップ、数と同じような仕方では存在しているとは捉えていないだろう。異類はどのような仕方では存在しているのだろうか。ここで第二章の井上円了の話思い出してみると、異類の知覚が主観的、ようするに個人的であるのなら、どうして私たちは公共的に異類の存在を知っているのだろうか、と疑問に思う。それは、やはり異類は私たちが共通して認められる存在の仕方ではしているからだろう。

民俗学者の小松は「人間がいなければ妖怪は存在しない³¹」と言っている。これは妖怪に限らず異類全般にいえることだろう。神が我々を創り出したのではなく、我々が神を創造した。我々の死があるから、幽霊の存在を創造した。或る時、或る場所を境に私たちとは違う世界があるから、妖怪の存在を創造した。異類、特に妖怪や幽霊が現れるのは、黄

31 『怪異の民俗学2 妖怪』p.254

昏時・深夜、これら全てが昼から夜へあるいは光から暗闇への移り時である。黄昏の語源となる「誰そ彼は³²」は昼から夜に移り変わる時、向こうから歩いてくる人物の顔が翳って見えないことを表す時である。他の異類が現れる場合も昼間であっても日常とは少し異なる場所だったりする。例えば、山中の獣道、海辺、崖下、辻が、場所という日常と非日常の境界になる。小松が境界は「秩序」と「無秩序(反秩序)」が相接し交錯するところで、私たちがそのような領域に接した時、快感や恐怖心を抱く。そして、「怪異」は領域に立ち現れる生活世界の感覚や知識では把握できないことを意味する言葉で、「秩序」の領域(認識可能な領域)を超えた領域、つまり「境界」に発生する、と述べている³³。

ところで私たちは、雷をプラズマ現象であると科学的に了解しているが、まだ科学が発展しておらず現在のような絶対的地位を確立していないころ、私たちの祖先は空が稲光りする知覚現象に「鳴る神」という存在を与えた。そして、神の存在は自然現象を因果的な筋道を立てて考えられた。日常の自然現象は、因果性を持っている。例えば、雲が広がれば雨が降ったり、夏の後には涼しくなって秋が来たり。林達夫は「超自然的な驚異を感受するには、他方で自然の合理性という観念が成立していなければならない³⁴。」と言っている。そこで人間は非日常的な自然現象が起きた時でも、神を創造し因果的にその自然現象を考えた。私たちは幽霊の存在を他人の死の経験、他人の死後も自分の生は続いている事から、自らの死後について想像する。その時に想像された死後の世界を眺めている主体は、「私」という意識を持っている何かだ。その何かは死んでしまっているのだから肉体を持たない。肉体のない自分は何か、と考えた時に死後も自分が存在できる空間が共にあることも含めて考えられている。それが死後の世界で、私たちは死ねば肉体を必要としない世界に渡る。渡ることができた場所ならば、帰ってくる事もできる。死後の世界に行った人々が生きている自分たちのところに来る事ができると考える。実際、死者が生前とは異なるありようで訪れた体験談を耳にすることがある。

幽霊は、幽霊になる前生きていたのだから、何某という名前を持っている。幽霊は個別的に出現する。一方、妖怪には小豆洗いの何某という名前はない。妖怪と遭遇する現象は公共的であり、幽霊は個人的に現れる。例えば、小豆洗いは夜の川辺に小豆をとぐ音で、誰にでも確認される可能性があるが、お岩さんは伊衛門の周辺に現れる。そのため、妖怪と幽霊には違いがある。柳田は、幽霊とオバケ(妖怪)の区別を個別的に現れるものと無差別的に現れるものとしている³⁵。しかし、何某と言う幽霊は個人的であっても、現象においては同じである。お岩さんは伊衛門にしか現れなくても、どの幽霊も深夜や柳の下など似た状況で現れる。その点で、妖怪と幽霊は共通している。

³² 『妖怪談義』 p.36

³³ 『怪異の民俗学 8 境界』 p.440

³⁴ 『江戸という幻景』 p.61 から、渡辺が引用していたものを引用。

³⁵ この他にも、幽霊は向こうから訪ねてくることや、丑三つ時など明確な時刻があると言い、オバケと区別している。『妖怪談義』 p.15-16

また江馬務が『日本妖怪史』(中公文庫 1978)のなかで 夜間いかなる時刻に出現が多いかというに、早くは夕刻から始まって、五ツ(八時)(お伽厚化粧)二更(九~十時)(狗張子)子刻九ツ(十二時)(太平百物語、お伽厚化粧)ことに草木も眠る丑満時(午前二時)(太平百物語、今昔物語、怪談登志男、怪談見聞実記)などは最も妖怪の乗ずる時である。そして夜明けに至ると漸時その影を収める と述べている。(『評釈「天守物語」妖怪のコスモロジー』より引用されたもの)

異類が現れる状況から考えると、異類は彼岸と此岸の狭間には何か隔てるものが存在しているという人々の感覚によって生み出されたのだろう。異類がかつて信じられた存在の意味は、そういった私たちの日常世界とそれとは別に存在する世界の境界を示すものであった。そのようにして、科学的に考えられない現象を説明する存在であった。その考えられた存在に、偶然知覚が加われば、例えば珍しい鳥が西にわたるのを確認した後、集落の人間が突然死んだり、神鳴りが聞こえた後、鉄砲水が集落を壊滅させたり、そのような事が毎回でなくとも、数回に渡って同じ現象を知覚で確認できたなら、より異類の存在は人々にとって確かなものとなったであろう。異類がそのような形で現れる一方で、私たちが細菌、原子などの存在を信じるのは、自分たちの知覚世界に適合するように考えられた存在であった。それらは私たちの生活世界にある存在だからだ。

現代の異類は、科学の合理的な筋道によってほとんどの人々にとって疑わしい存在となってしまう。大森荘蔵は私たちが平素疑う存在の対象について、「科学的存在ではないということは、いかなる意味でも存在しない、ということではない。ただ、科学的存在ではない、ということだけを意味する³⁶。」と言っている。また、「いかなる非物理的作用も働いていない、ということ物理的に証明することは論理的に不可能³⁷」であるとも言っている。だから、科学によって異類の存在が否定されるわけではない。普遍や数で示したように、異類の存在の仕方を考えてみると、現代の異類の存在は正常な知覚で認められる存在や知覚世界に適合させて考えられた存在とは異なるありようで存在している。

異類に関係する出来事は怪異³⁸であるが、怪異は先述したように、境界に生じる。この境界は我々の生活に付随している。日常と非日常のように、怪異は私たちの現実的な世界と非現実的な世界が交わるところに位置している。渡辺は江戸の人々を「迷信・俗信は笑って否定しながら、奇譚や怪異を信じるのはなんら矛盾ではなかった。なぜなら奇瑞や怪異は実在としてこの世に包摂されるものだったからだ。³⁹」と述べている。あちらとこちらを行き来する何か、あるいは本来は明確に区切られている世界が、ある条件の時に重なって遭遇してしまう何か、が異類であると考え、異類は知覚で直に立ち現れる物体や、知覚世界に適合するように考えられたものとは、異なるあり方で存在している。

笠原は「そもそも妖怪が妖怪であるためには、つねに人間の生活圏の周辺にいて、人間の想像力を刺激しなければならない。人間の世界から隔絶した絶対的彼岸にいたのでは妖怪としての意味をなさないのである。⁴⁰」と言っている。私たちは、異類達の向こうにある非現実の世界を想定する事によって、私たちの現実世界を浮き彫りにさせている。私たちは異類が存在する非現実的な世界を想定することによって、自分たちの住む生活世界が現実的であることを確認している。異類は私たちの生活圏内にある全てのもの、例えば人やコップや数や普遍と同じような存在であってはならない。自分たちの現実を浮き上がらせるものが、現実世界に存在するものと同じあり方で存在すれば、異類が非現実的でなくなるからだ。異類は、非現実と現実との狭間にあるから異類である。異類は、私たちの現

³⁶ 『知の構築とその呪縛』 p.40

³⁷ 『知の構築とその呪縛』 p.31

³⁸ 神々の場合、神託・啓示など神秘性のある厳かな言葉で表現されるだろう。

³⁹ 『江戸の幻景』 p.60

⁴⁰ 『評釈「天守物語」妖怪のコスモロジー』 p.76

実世界の領域に入り込んでしまうと、異類ではなくなるだろう。例えば、江戸時代に鳥山石燕によって、妖怪が描かれた。それまで似た名や共通した特徴を持つ妖怪であったものが、絵によって明確に人々にイメージされるようになった。妖怪は次第に、キャラクター化していき、雑多で抽象的な猯としていたものが、具体的な姿として私たちの世界に入り込んできた。こうしてキャラクター化した妖怪は、境界から私たちの領域に移り、フィクションと似た存在の仕方をしていて、異類の存在の仕方をしなくなってしまった。

異類が異類としての仕方では存在しなければ非現実世界（＝異世界）を私たちは認識不可能な領域であるという形ですら、確認することができない。そのことは、私たちの生活世界が認識可能な領域であるということも確認できない。なぜなら、対照となる非現実的世界がないからだ。だからこそ、異類の存在によって私たちは自分たちの現実に揺さぶりをかけ、自分の生の「現実」を確認するのである。私たちは異類に超自然的事象の存在を担わせ、私たちの生活をより現実的なものにする。異類の存在のあり方というのは、そうした現実と非現実の境界に立ち現れ、私たちの現実性を見つめさせるものである。だから、異類は私たちが通常「いる・いない」と断定できる存在ではないのだ。断定してしまったら、それは私たちの領域に組み込まれてしまったものか、あるいは私たちの世界が現実的であるということを確認する手段を手放すことである。異類はいるかどうか断定できない。ただ、私たちの領域と異なる領域の境界上に現れる。私たちとは、存在のあり方そのものが異なるのである。

私たちは死者の幽霊の存在を思うことで、死者の生前あるいは自分の生や死後を思考する。自分たちで合理的に割り切れないものを、異類に担わせることで私たちは理解を試みる。そして、私たちはその理解不可能な世界と、自分たちの理解可能な世界を結びつける。異類にはそのような媒介的存在の意味を持っている。

おわりに

このようにして、異類も同類とは異なるあり方で存在している。私たちの周りを取り囲むものどもを、私たちは思考の対象にしたり、他人との会話の対象にしたりする。また、自分たちが知覚した現象を説明する手段として用いる。これら全体において言えることは、どんな存在の仕方をしているものでも、名前を持つということである。私たちは指示代名詞だけで特定の現象や対象を思考したり、他人に伝えたりすることは困難である。そもそも、マクベスも自分が知覚した短剣を、自らが経験して知っている短剣の普遍の一例として、知覚されている対象を短剣と命名し、触れられない(=知覚の不完全さ)事から、これが幻であると言った。観衆の私たちは、「短剣」と「幻」が何であるか言語的に理解している。だからこそ、マクベスがどんなものを見ているのかを理解できる。

また、雷であっても空が稲光する現象を指し示すために、私たちの祖先は擬人化して「鳴る神」という名を与えた。そして、今ではそのように稲光する現象を私たちは「雷」という名前を用いている。共通の言語を理解する者どうしであれば、現象を目の当たりにしていなくとも「雷」と聞いただけで、現象を想起的に立ち現すことができる。

最後に柳田の著書からオバケのことについて少し触れておこうと思う。地域で異なるのだが、ガゴ、ガモ、ガモシといった名のオバケがいる。そのオバケは具体的な姿はないが、その多くが森に住み、子どもを咬んだりする⁴¹。子どもは「ガゴが来るぞ」という言葉に怯える。しかし、ガゴが具体的にどんな姿をしているのかは知らない。ぼんやりとしたイメージを持っているだけである。異類というものの多くは、具体的なもしくは統一的な姿を持っていなかった。ただ、共通して場所や時間の境界に現れるものであった。そういう存在であった。だが、名前だけはあった。名前を与えられたということは、大げさな表現をするなら、存在を与えられたということではないだろうか。そういう意味でいうならば、名前のあるもの全ては存在しているということである。ただ、その存在の仕方が異なるだけなのである。

ある対象を存在することを信じる人と信じない人には、「存在」に対する思いにずれがあると私は言った。このずれとは何か。それは、信じない人々は自分の生きることに直接関わる事物、例えば実践的優位の存在や知覚世界に適合するように考えられた存在、のみを「存在する」ものとして捉えているのではないだろうか。そして信じる人々は、もっと緩やかな枠組みで「存在」を捉えているのではないだろうか。あるいは、信じない人々は、キャラクター化され、私たちの現実世界に招かれた異類を考えているからかもしれない。信じる人々は異類を自分たちの現実世界に招き入れていないのかもしれない。フィクションの世界の生き物を存在すると思う人はいないだろう。

不思議なことに両者ともフィクションの「存在」には同じ意見を持っている。そのことから考えると、フィクションは他のものとは異質だと私は思う。なぜなら、もともと、創造のものであるという理解があるにも関わらず、ドラマ化や映画化で役者が演じれば、架空の人物は実践的優位の存在と同等の資格を持って、私たちの前に立ち現れるし、幻覚の場合と異なり、公共性も持っている。また、異類のように境界に立ち現れることもない。

⁴¹ 柳田は「咬もうぞ」が変化していったのではないかと考察している。(『妖怪談義』p.51-52)

これはどういうことか。

一つの考えとしては、フィクションは言語内に漂うように存在している、もしくは私たちの周りに存在する事物に重ねて存在（イメージとしては憑依）することができる存在の仕方ではないだろうかと思う。要するに、フィクションというのは、語りや文章ではじめは表現される。仮に絵画で表現しても、創作者は頭の中でその作品の物語を作成している。抽象的な思考は、言語がなければ成り立たない。そうした言語でのみ表現されることが、私は言語内に漂う姿であるように思えた。また、それが映像化されることは、もともと役者という人間が言語でのみ存在していた架空の人物を演じることで、二重に存在しているように思えた。この私のフィクションについての考えを、次は考えていきたいと思う。